

ジャック・ロンドン州立史跡公園（ロンドンの最後の夢）

芳川 敏博（京都府城陽市）

はじめに

2007年9月5日（水）、ジャック・ロンドン（1876 - 1916）が若い頃過ごしたサンフランシスコ（クリフ・ハウス、ゴールデン・ゲート・パーク、リンカン・パーク等）やソノマのジャック・ロンドン・ヴィレッジにあるジャック・ロンドン・ブックストア跡を經由して、晩年を過ごしたグレン・エレン（人口約1,300名のサンフランシスコの北方40マイルにある田舎町）のジャック・ロンドン州立史跡公園内にあるロンドンゆかりの地を訪問した。100年の時を超えて、ロンドンがサンフランシスコからオークランドを経て、グレン・エレンにやって来た時の感動を追体験するとともに、辻井先生の丁寧な解説やその他の関連資料をもとに、ジャック・ロンドン州立史跡公園とロンドンの最後の夢（生命の永遠性）について考察する。

ロンドンとグレン・エレン

ジャック・ロンドンの人生を2分すると1876年から1903年と、1903年から1916年までになる。最初の期間は出生からグレン・エレンに出会うまでの準備期とすると、後半はグレン・エレンに出会って他界するまでの収穫期にあたる。準備期にはいろいろな試練が待ち受けていたが、ロndonはそれを自分の貴重な経験にした。サンフランシスコの貧しい複雑な家庭で生まれ、引越しを繰り返し（サンフランシスコでは3回、対岸のオークランドでは少なくとも24回）いろいろな経験（小船でサンフランシスコ湾内を航海、缶詰工場での労働、カキの海賊、アメリカとカナダを浮浪、金の採掘、父親の死亡、1日19時間書いて数ヵ月後に雑誌に作品が掲載される、最初の結婚など）をした。

ロンドンはどう底の生活状態を抜け出してケーブルカーで上るがごとく丘にある安定した生活ができる場所と心静かに幸せな家庭がもてる安住の理想をグレン・エレンと2番目の妻のチャーミアンに見出したのだろう。『月光谷』（1913）で「まるで、夢のようだ。故郷へ帰ってきたかのようだ」と述べている。また、新婚旅行中にロndonはチャーミアンに、「一緒にそばにいてくれて、何でも一緒にできて、もう寂しくなんかない」と告白している。1903年には代表作の『野性の呼び声』や『どん底の人びと』、1904年には『海の狼』を書き終え生活が安定し、1905年11月19日にシカゴで講演旅行中に再婚した。

私達が騒々しいサンフランシスコからオークランドを経て、ブドウ畑が広がり、ブドウの香りが漂うソノマ地区に入り、グレン・エレンに近づくとまさにそこは別世界、ロndonが理想の地と称したことが実感できた。そこは、自然、太陽、森林、澄み渡った空気、心地よい微風に囲まれたまさに理想の地であった。そのうえ、そこで出会った人々（ジャック・ロndon財団の役員の人達、ジャック・ロndon州立史跡公園の森林監視員、「幸せの壁の家」の店員、スーパーマーケットの店員など）は大変親切で親しみやすく、人間味あふれ、温かな気分になれた。グレン・エレンの自然と人々に接して、ロndon夫妻はきっと同様の幸せな満ち足りた気分になったことでしょう。ジャック・ロndon・ロッジの宿泊やウルフ・ハウス・レストランでの食事も、ロndon夫妻の幸せな生活の一部を追体験できた。

ロンドンとジャック・ロンドン州立史跡公園（ロンドン大農園とロンドンの家）

ジャック・ロンドンは1905年7月6日に130エーカーの土地を購入した後、1913年までに6回農園を購入し約1400エーカーの大農園主になった。当時は土地が荒れており農業には適さない所であったようだが、ロンドンはその荒れた土地を、最新技術を駆使して農業に理想的な所にした。

ロンドンとグレン・エレンとチャーミアンとの出会いは1903年に先妻と子供2人を連れて夏の休暇を利用してキャンプに出かけた時に始まる。その後ロndonは家を転々とし、1906年2月に Wake Robin Lodge に新居を構え、ここを1911年9月5日に最終の夫婦の家(33回目の家)に移るまで主な住家とした。ほぼ同時に、ロndonはオークランドに母親と姪のために家を購入し、2階にはジャック・ロンドンとチャーミアンの部屋も用意した。

ジャック・ロンドン州立史跡公園を散策して、木と石の存在意義について考えさせられた。合計65,00本のユーカリの木(硬い木材として売り出そうとしたが失敗に終わる)と数多くのアメリカ杉を見た。それはロンドンが1908年に初めて病気をし、1913年にも入院して自分の体力の限界を痛感し、人間の生存に不可欠な酸素を多く提供する森林の大切さを知ったからではないか。特に、アメリカ杉は、雷にやられても、また、再生する強い生命力を持っている。アメリカ杉の木は、ロンドン夫妻の最後の住居だけでなく、「狼城」や「幸せの壁の家」にも石の下に使われて、内面から生命力を感じていたように思える。

石も「豚宮殿」やサイロ、小屋だけでなく、「狼城」や「幸せの壁の家」の木を外から守るために用いられていた。「狼城」などは千年間も長持ちすると言われていた。石の多用は1906年のサンフランシスコ大地震の影響があると思う。サンフランシスコは震源地であるので町がほぼ全滅し、『スナーク』号の出航が大幅に遅れたのはわかるが、かなり離れているグレン・エレンの町にもある程度被害があった。小屋は建設中の基礎部分が破壊され、The Chauvet Hotel の隣にある郵便局と雑貨屋があるビルの3階部分が地震で壊れ、現在は2階建てになっている。馬小屋の近くにあったワイン工場は地震で全滅になった。

ロンドンにとって、グレン・エレンは夢の実現の場であった。もちろん、そのための一人倍の努力と研究熱心さで、現実をよく見ながら先のことも考えてのものであったことは言うまでもない。ロンドンが実現しようとしていた夢は、経済的な安定、作家としての地位の確立、精神的な安心が得られる家、科学的な有機農業を主体とした肥沃な土をもった農園、健康的な生活・旅行、友人との知的交流などである。そしてそれを統一する最大の夢は物質と精神の永久的性であると思う。そのうち、アルコール中毒の他、いろいろな病気になり亡くなる前年の1915年にチャーミアンと養生のために2度にわたるハワイ旅行をするが病状は回復しなかった。そして、精神的に安定できる家と友人との知的交流は、「狼城」の焼失で完全には達成できなかったが、夫婦の家(Cottage)と「幸せの壁の家」である程度達成されたと考えてよいだろう。経済的な安定と作家としての地位の確立、そして、科学的な有機農業を主体とした肥沃な土をもった農園の夢は十分に達成された。

1959年(チャーミアンの死後4年して) Irving and Mildred Shepard は、39エーカーの農園と「幸せの壁の家」、「狼城跡」、「ロンドンの墓」をカリフォルニア州に寄贈した。そして、1960年には、「ジャック・ロンドン州立史跡公園」の寄贈式が開催された。その後、1977年から1979年まで、カリフォルニア州は「ロンドン夫妻の家」を含む756エーカーの土地と建物を購入し、1979年から一般公開された。1995年時点で年に約75,000人がこの地を訪問している。

A 「ロンドン夫妻の家」(Cottage)

私達は、1911年からロンドンの他界する1916年まで夫婦で暮らし、その後、1933年までチャーミアンが一人で過ごしたジャック・ロンドンとチャーミアンの2番目の家を訪問した。この家は「コティッジ：田舎風の小さな家」と呼ばれているように音一つしない「月光谷」の丘に立っている平屋の家で、周りは樹木に囲まれ、前面は素敵な香りのするブドウ畑を見渡すことができる。この家は元々1862年に建てられたものであるが、ジャック・ロンドンの晩年の5年間をチャーミアンとの生活と仕事、農園、友人との交流の拠点として過ごした重要な場所である。

当時は鍵が外されていて、自由に友人がやってきて宿泊や食事、ロンドン夫妻との会話等を楽しんだようであるが、私達が訪問した時は午後4時まで例外的に中に入ることができなかったのは非常に残念であった。しかし、家の周辺から中を想像すると、まるで楽しそうなロンドン夫妻の会話やロンドンが小説の内容を説明し、チャーミアンがそれをタイプしているのが聞こえてくるようであった。1916年当時は、使用人の部屋や客間、約18、000冊の本と多くの資料を置いていた書斎・仕事部屋と別棟の食堂・台所を含めて13部屋あったが、ロンドンの寝室とチャーミアンの寝室は両端にあった。これはチャーミアンが極度の不眠症であり、お互いに睡眠を妨害しないようにとの愛情の表れと思った。また、ロンドンとチャーミアンのスリーピング・ポーチは別の部屋であったが、隣同士で相手のようすがわかるように位置していることなど、女性の権利が十分に保障されていない時代に、自由と独立を基礎にした協力関係に基づく新しい愛の形が見られる。ロndonはチャーミアンのことを「mate woman：女性のパートナー」と称していたのもうなずける。ロンドン夫妻には「Joy:喜び」という名の子供が生まれたが、3日目になくなった。しかし、子供はいないが、新しい形の「家庭」があったのだろう。

B ジャック・ロンドン大農園とレイク(Barns, Vineyards, Pig Palace, Silos, Lake):

ユーカリの林を抜けると、3つ並んだ石造りの小屋(Barns)が、100年の時を経てほとんどそのままの姿で建っていた。その建設には中国やイタリアの技術が使われており、イギリス中部産の大型で強い荷馬車馬(shire horses)を入れておくための小屋や肥料を肥沃なままで保存するための小屋は、ロndonは世界各国の農業や牧畜に関する資料を研究した成果だと思った。

荒れた土地を農業に適した肥沃な土地にするために中国や韓国、日本から多くのことを学び、ついにロndonはアメリカ中の農家の人が参考にし経済的な安定が可能な最新式有機農業を開発した。その成果の一つとしての見事なブドウ畑は私達の眼を楽しませてくれた。その結果、近年では、カリフォルニアワインはフランスワインを抜いて、世界のコンテストで賞を取るまでになった。これも、ジャック・ロンドンの努力によることが大であろう。1916年時点で、ロndonは1日のうち2時間だけ執筆をし、10時間は農業に時間を割いている。なぜそれほどまでに、肥沃な土壌に執着しているのかについて、「現在の不況の解決策として、土壌の見直しを提案する。農業が経済の基礎であると確信する」と述べている。1911年から1916年までのわずか5年間で、ロndonは農業と牧畜に集中し、カリフォルニア州の農業・牧畜の基礎をつくった。

次に当時最新式の豚小屋である「豚宮殿」(Pig Palace)に到着した。1915年に約3,000ドルをかけてたもので、3つのコンクリートの大きく、ユニークな建物から成っている。中央にあるのは19頭の豚に餌をやることのできるもので、ロndonがデザインをしており、自慢のものであった。アメリカ中の豚の生産力を向上させることにより、経済不況に対応するという意気込みが感じられた。このようにロndonはブドウ畑での農夫(farmer)

としての顔だけでなく、豚の飼育という点で牧場経営者（rancher）としての顔をも持つ。亡くなる6日前にも豚を抱いて可愛がっている姿がよみがえった。

すこし西の方に行くと大きな2つのサイロが私達を迎えてくれる。これは1914年に建てられたカリフォルニア州で最初のコンクリート製のサイロであった。ここに自分の牧場と近隣の牧場で取れた牧草を貯蔵して、肥沃な土壌の大きな役割を果たした。ロンドンは、「死んだ土壌を生き返らせる」という強い気持ちをもっていた。計画では、あといくつかサイロを作る予定であったが実現しなかった。

アメリカ杉を抜けて丘に登ると、「レイク」と呼ばれる池と小屋があった。このあたりも、樹木に囲まれ、太陽をいっぱい浴びて、静かで気が休まる場所である。1914年に完成した石のダムによって常時せきとめられている池の水は、グラハム川（Graham Creek）からパイプでもたらされているものである。この水を使って、二毛作が可能になることを期待していた。この池は農業の灌漑用だけでなく、夏に友人をボート遊びで接待するロンドン夫妻のお気に入りの場所であった。池の近くのアメリカ杉でできている小屋は、更衣室になっており、小屋の両側にボートを立てかけておくことができるようになっている。

C 「狼城」(Wolf House)

夫婦の家からかなり離れたところに、「狼城」(Wolf House)があった。4階建ての石とセメントだけの壁と煙突だけがアメリカ杉に囲まれて、日光に照らされて異様な感じを私達に与えた。1913年8月22日、ロンドン夫妻がこの新居に移る予定の数週間前（数日前という説もある）原因不明の火事で、石の壁の内側にあるアメリカ杉が燃えてしまった。私達が訪問した9月5日も大変暑く空気が乾燥していたことを考えると、自然発火して火事になったと想像できる。

ロンドンにとって、「狼城」は大きな夢であった。34回目の家にして初めての満足のいく家であった。ロンドンは、「この家は自分の人生の中で初めて真に快適な家となるであろう」と、述べている。この家の土地を購入して場所を決定したのは9年前の1904年からで、完成直前には、夫婦そろって「狼城」を見学したり、友人を招待したりして完成を大変心待ちにしていた。「狼城」の建設は2年前の1911年から始まっていた。その他にも、最初の奥さんと2人の子供達のためにオークランドに家を建てたり、牧場に、旅行中などの場合、牧場の管理をしてくれていた義姉のために家を建てたり、牧場から遠く離れた所に貸し出す別荘を建てることを計画していたが、この「狼城」がロンドン夫妻にとって最高の夢であった。「狼城」の1階と2階部分は主にゲスト用で、3階と4階部分がロンドン夫妻の部屋であった。ゲストルームが多くあることから、ロンドンが自分達の生活だけでなく、いかに友人との交流も重視していたことがわかる。また、ロンドンの膨大な本や資料を収容する部屋も用意されており、夫婦のプライバシーも確保されていた。

「狼城」は1906年に経験したサンフランシスコ大地震の教訓から基礎を始め骨組みも大変強固なものであったが、乾燥した樹木に囲まれた山火事には勝てなかった。ロンドンは「狼城」の焼失に接し、平然とした調子で、「再建しようと思えばできるが、もう再建はしない」と隣人に話している。その日の夜、ロンドンはチャーミアンの前で涙をこぼしたが、しばらくして平静を取り戻し、「お金を無駄にしたことが悲しいのではなく、「狼城」の美観を損なったことが残念なのだ」と告白している。これを、ロンドンの唯物主義から精神的な価値への転換と考えることはできないだろうか。

家の名前に「狼」という名がついているのは、親友で詩人のジョージ・スターリングが『海の狼』の出版によりニックネームをつけ、その後、ロンドンも「狼」に興味を持ち、『野性の

呼び声』を始めとする作品に「狼」を用いて、自分の代名詞としても「狼」を使っているからである。そのうえ、狼は、「自立心、勇気、力」の象徴としてロンドンの目標でもある。また、狼は、社交的であると同時に個性的な動物でもある。「狼城」は非常に個性的な建物であるが、社交の場でもあることを考えると、その命名が、ロンドンの理想をうまく言い表していることがわかる。

D 「墓」(Grave)

「狼城」から北に少し行った小高い丘の森の中に、二十世紀最大のロングセラー作家であるジャック・ロンドンの墓があった。それは、石が一つ置いているだけの物音一つしない所にあった。これは、「小山に僕の遺骨を葬ってくれたってかまやしないよ。「狼城」跡から赤い丸石を持ってきてくれ」と生前にチャーミアンに依頼したからであった。しかし、ロンドンの偉大さと比べるとあまりにも落差が大きい質素な墓にショックを受けると同時に、彼の人生とは何であったのか、後世に伝えたいメッセージは何かなど思い巡らすことになった。仮にロンドンの最大の夢が大金持ちになることであったのなら、もっと大きな墓を皆が分かるような大都市に建てただろう。

ロンドンが、亡くなる前日の1916年11月21日、午後6時30分頃いつものように夕食を済ませた。そして、夕食後のチャーミアンとの会話でも、ロンドンは意気盛んに社会的な貢献について語り、大農園内に学校や、店、郵便局を作ろうと候補地について指示をしていた。様態が悪化して、翌日の11月22日午後7時45分に亡くなり、死因は尿毒症による腎臓疾患とされた。しかし、死因については、モルヒネの取りすぎによる自殺説を唱える学者もいる。2004年に実施された関係者によるロンドンの死因についての比較調査によると、病死説と自殺説は半々であった。いずれにしても、40年という短期間にいろいろな困難や貧困と戦い、50冊の作品を世に送ったロンドンの体はボロボロであったと推測する。

ロンドンは、死についてどのように考えていたのであろうか。1908年に『スナーク』号で世界一周の航海の途中病気になり初めて死を意識するようになって以来、1913年の入院を通じてよりいっそう、死について考えるようになった。1913年というと、ロンドンが世界一高給取りの作家になったことを考えると何とも皮肉なことである。ロンドンの墓を目の前にして、「埃になるよりむしろ灰になりたい」と言った言葉を思い出した。それは、何も役立たずにどこかに消えていく埃よりも、肥沃な土壌になり、時と空間を超えて、世界中の人々にメッセージを与え続けていきたいという願いが込められているのではないか。

次のようなロンドンの言葉を総合的に考えると、精神は永遠に生き続け、死を完全に否定的にはとらえていないことが分かる。チャーミアンが書いた本によると、ロンドンは「死は休息である」と言っている。そのように考えると、いつも全力で理想に向かって努力を重ね、多くの夢を実現し、チャーミアンの遺骨も後年になって一緒に埋葬され、人に引き継ぐ財産と、有益なメッセージを残し亡くなったロンドンは、幸せだったのではないだろうか。

1902年：「私は死ぬことを恐れない。」

1909年：「死に痛みはない。」

1914年：「死ぬということは、体が完全に消え去ることだ。」

1915年：「精神は死なない。肉体が死ぬだけのことだ。」

E 「幸せの壁の家」(House of Happy Walls)

「ロンドン夫妻が眠る墓」を北西に降りていくと、ロンドンの死後3年経って(1919年)大農園にあった石を利用して建てた「幸せの壁の家」が見えた。この家にチャーミアン

はすぐには住まないで、晩年の1934年から1945年までここで暮らした。外から見ると、その家はロンドン夫妻が夢見ていた「狼城」とそっくりであった。また中に入ってみると、ロンドン夫妻の家（コティッジ）の様子を再現するような部屋の数々、そして、二人で行った航海などの冒険旅行の説明、彼の本やビデオの店など、ロンドン夫妻の思い出がいっぱい詰まった家ということで、「幸せの壁の家」と名づけたと想像する。チャーミアンがこのような家を建て、ロンドンの博物館として機能させたことには、チャーミアンのロンドンに対する深い愛情を感じることができた。「幸せの壁の家」の建設によって、ロンドンの死後もチャーミアンは彼の霊と一緒に過ごし、ロンドンの偉業とメッセージを世界に発信し続けたことを、ロンドンは墓の中で大変感謝していると感じた。それは、チャーミアンがロンドンの最後の夢である魂の永遠性をよく理解していたから可能になったのだろう。

ジャック・ロンドンの最後の夢

ロンドンの最後の夢は「生命の永続性」にあると思う。つまり、自分自身の魂の永続性と、地球の生命の永続性である。夢は人生の各段階で異なるが、ロンドンの場合、(1) 貧困からの脱出、(2) 作家としての成功、(3) 自分の永住の家、(4) 牧畜経営、とほとんどの物質的な夢を達成して、ほっとした時に病気になり空しさを感じ、3回も遺言を書いている。人間の評価は死ぬ間際の人生についての哲学にあると思う。

ロンドンには神を信じなかったが、死後の魂が残るということは信じていた。ロンドンはピンチを忍耐でチャンスに変え、チャンスを好奇心で大きなチャンスに変えた。常に一般の貧しい人々に語りかけ、夢を与え続けたので、時代と空間を超えた普遍性がある。私達ジャック・ロンドン愛読者や研究者は、彼が残したものの火を消さないで、永遠に力強く燃えつづけられるように力を合わせて努力しなければならないと思う。そのことが、人生の真の意味を考える文学の復興のきっかけになればよいと切に願う。ジャック・ロンドンのファンはアメリカだけでなく、ロシアやドイツ、フランスを初めとするヨーロッパや日本などに多く存在する。また、アメリカや日本、ドイツ、フランスではジャック・ロンドン協会や財団があり、読書会や研究活動、啓蒙活動など多彩な活動が展開されている。そのような有意義な活動に対して、心より感謝する。

晩年ロンドンは、都会を離れてグレン・エレンの森で、荒れはてた土地を肥沃な牧畜に適するところに変えることに精力を費やした。なぜ、これほどまでに森にこだわるのだろうか。それは森が地球の生命の鍵を握ると信じているからではないだろうか。地球は46億年前に誕生し、あと10億年で死を迎えると言われている。これは、人間が1万年前に小麦を植えて自然をコントロールし始めて以来、工業化社会を経て、地球が46億年かかって蓄積してきた地球上の物や地下資源を短期間のうちに急速に破壊しているからである。人間を含む動物は、海から川、草原、そして、森へと移り住んでいった。生命を支えているのは酸素であり、それは人間が生活するところでは森に多く存在する。森を破壊することは酸素が減り二酸化炭素が増え、人間、そして地球の滅亡をも意味する。私達は物質的な欲望ではなく、自然との共生というロンドンの最後の夢を現実のものにするための必死の努力を地球レベルで根気強く行わなければならない最後の時期が差し迫っている。

私にとっての「ジャック・ロンドンへの旅」

私にとってのこの旅は、偉大な作家であるジャック・ロンドンが残した作品をより深く読むために、彼の生活した時代や場所を追体験することであった。特にロンドンが晩年を過ご

し、作家、農夫(牧場主)として理想の地であったグレン・エレンを詳細に報告できるのは、この「ジャック・ロンドンへの旅」を企画・添乗して下さった日本ジャック・ロンドン協会会長の辻井栄滋先生のお陰と、心よりお礼申し上げます。実際に体験し肌で感じるにより、今まで疑問に思っていたことが解決したり、また異なった幅広い視点からジャック・ロンドンと彼が世界に発信しているメッセージを考えるきっかけになったような気がする。人生は一回きりであり、ジャック・ロンドンや彼の作品をより深く研究することにより、人生の意味や、真の幸せについて、また、人生の心構えなどについて多くを学び、私の人生もより良いものにしたい。

ロンドンは40年という短い人生の中で現実を直視し、現実から逃げないで、死ぬ間際まで理想の夢を追いかけた。行動範囲はサンフランシスコ、オークランド、そしてグレン・エレンを中心に極北の地から南海諸島、東洋、イギリスまでいろいろと異なった環境や文化をもつ国々や地域に及び、太古の時代や未来にタイムスリップして視野を縦横無尽に拡大した。また、ロンドンは貧しい家庭に生まれたが、いろいろな人や本、出来事などの影響を受け前向きに努力することによって、世界で最も高給取りになり、周りの人にも感謝の気持ちを忘れず恩返しをし、時代と国を超えて影響力のある人物になった。絶望の中にあっても、常に夢を持ち続けることの大切さを痛感した。

参考文献 ラス・キングマン著・辻井栄滋訳、『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家 写真版ジャック・ロンドンの生涯』、本の友社、2004年

アーヴィング・ストーン著・橋本福夫訳、『馬に乗った水夫』、早川書房、2006年

Stasz, Clarice. American Dreamers- Charmian and Jack London, toExcel Press, 1999

Wilson, Margie. The Wit and Wisdom of Jack London- A Collection of Quotation from his Writing and Letters, WORDSWORTH, 1995

Haughey, Homer. and Johnson, Connie. Jack London RANCH ALBUM, Heritage Publishing Company, 1995

Haughey, Homer. and Johnson, Connie. Jack London HOMES ALLBUM, Heritage Publishing Company, 1987

Jack London STATE HISTORIC PARK Video Tour, California State Parks, 2006